

『トム・ジョウズ』に於ける愛と結婚について(1)

雲 島 悦 郎 *

要 旨

『トム・ジョウズ』は愛と結婚の書だと言っても過言ではない。愛と結婚が出来事として語られるだけではなく、作者や登場人物達によって大いに論じられるのである。

また、男女の愛は単に異性愛としてだけではなく、同胞愛と密接に絡めて論じられる。作品において同胞愛を実践する善人の典型は、地主オールワージーと、彼の養子として育てられ、最後には彼の実の甥であることが判明する主人公トムである。反対に、自己愛しかなく、他者への愛を欠く人間がおり、その典型がオールワージーの妹ブリジェット（実はトムの母親）と結婚するプリフィル大尉と、この二人の間に生まれた息子のプリフィル（実はトムの異父弟）である。

そして、他者への愛の有無が結婚観の相違につながる。同胞愛を重視する者が結婚する当事者同士の愛を重視するのに対し、同胞愛を軽視する者は、結婚は単に生活の便宜あるいは地位・財産（物質的利益）の獲得のためと割り切る。地主オールワージーは愛を結婚生活の幸福の唯一の基盤と見るが、一方、結婚に於いて現実的な利益を考慮しないのは無分別と考え、恋愛をロマンチックなものとして嘲笑う者がいる。愛を重視する者は結婚に於ける当事者同士の自由意志を尊重し、親などが結婚を強制するのは不正・抑圧と見る。また、夫婦の関係を上下関係ではなく、対等な友愛的関係と見る。その反対に、親などが子供の結婚相手を決めるのが当たり前であり、本人同士が好き合っているかどうかは考慮に値しないと考える者がいる。そして、夫婦の関係を主人と召使の関係のようにしか見ない者もいる。

愛はまた心と体の問題としても論じられる。愛には肉体的な側面と精神的な側面があるが、作者は情欲と愛の違いについて、若さと美しさが情欲の動機であるのに対し、尊敬と感謝の念が愛の動機であると言う。そして、尊敬感謝の対象は徳（行）であり、特に善良な心と善良な行為であると考え。そして、幸せな結婚をするには、善良な心を持った相手を選ぶべきだというのが作者の主張である。

作者は愛と性欲を混同することを戒めるけれども、健全な意味での性愛を否定する訳ではない。また、異性の容姿だけに拘ることには否定的だが、容姿を無視すべきだとは決して言わない。作者の代弁者と見られるオールワージーの考え方もバランスがとれており、結婚に於ける当事者同士の自由意志を尊重するけれども、同時に親が子供の選んだ相手を拒否する権利も認める。また、結婚に於いて愛を重視するが、また物質的条件が整う必要性も認める。

作者は男女両性にとって貞節が重要であると考えられるけれど、世の中には、愛と淫欲を取り違え、また性愛と結婚を切り離して淫欲に耽る者が多いことを嘆く。そして、このような性的放縱の例が作品では数多く挙げられ、婚前交渉や私生児のことが話題になる。作品の主人公が私生児であることもあって、私生児の問題はかなり大きく扱われる。

当時、実際に恋愛結婚が行われていたとは言え、結婚は個人同士のものというより家同士のもので、子供の縁組みの適否については親が正しい判断ができるという考え方も根強く、そういう親たちが子供に結婚を強制しようとすると、中には秘密結婚や駆け落ち結婚に走る者が出る。しかし駆け落ち結婚などは利己主義者がするもので、娘を親元から連れ去ることは盗みに等しい行為と考えられる。そして良心という行動原理に強く支配される主人公トムはそのような泥棒の真似は絶対にできないし、また相手のソファイアも、父親の同意なしに結婚するつもりはないので、決して駆け落ちという非常手段を選ぶことはない。

目 次

はじめに

1. 愛と結婚（概観）

1-1 愛—体と心

1-2 財産・便宜・利益

1-3 駆け落ち—利己主義と盗み

(以上本号, 以下次号)

2. トムとソファイアの恋と結婚

おわりに

* 下関市立大学教授

はじめに

ヘンリー・フィールディング (1707-1754) の『トム・ジョウンズ』(1749) は徹頭徹尾、男女の愛と結婚が話題になる作品である。⁽¹⁾ 本作品は、作者により「散文による喜劇的叙事詩」(V, 1) と名付けられる喜劇の一種であるから、その限りでは男女が愛し合い、最後にはめでたく結ばれる話になるのは当然と言えば当然だが、しかし愛や結婚がただ単に出来事として語られるだけではなく、愛と結婚の問題が作者や登場人物達によって大いに論じられるところが単なる喜劇と異なる点である。

また、この作品では男女の愛は単に異性愛としてだけではなく、フィールディングの他の作品でも常に取り上げられる同胞愛 (“Charity”) の問題と密接に絡めて論じられている点も重要である。第六巻第一章は「愛について」と題されるが、その中でも触れられるように、愛は同胞愛であれ異性愛であれ肉親愛であれ、全て根底でつながっている。そして、真の意味で異性を愛することは人間同胞を愛することとつながっているという主張が作品の中に読み取れるのである。

作品において同胞愛を実践する典型的な人物は地主オールワージーである。彼は善人 (“good Man”) の典型として描かれているが、彼の他に、「捨て子」 (“Foundling”) でありながら、彼の養子として育てられ、最後には彼の実の甥であることが判明する主人公トムもまたオールワージーと同じ善良さ (“Goodness”) を顕著にそなえる人物として描かれる。そのトムはオールワージーのことを「神が自分を模して造り、その雛形として地上に派遣した仁慈」(VIII, 2) とまで表現する。そして彼等は等しく、人間同胞のことを他人事として見て見ぬ振りをしてはおれぬ種類の人間であり、作者もトムのことを「我は人間なり、人間に関することは何事も他人事とは思わず」(古代ローマの喜劇作家テレンティウスの作品中のある男の言葉) と言える人物だと述べる (XV, 8)。

一方、世の中には自分のことしか頭になく、常に自己の利益のみを考慮し、自己愛のみで他者への愛が欠如した人間がいる。そして、その典型が、オールワージーの妹ブリジェット (実はトムの母親) と結婚するブリフィル (ブライフィル)⁽²⁾ 大尉であり、またその二人の間に生まれた息子のブリフィル

(トムの異父弟)⁽³⁾ である。彼らは、「磨かれたボーリングの球」のように丸くなって、人の身に降り掛かる災難には目もくれず世間を転がっていきける「心の頑強さ」を持った人物である (XIV, 6)。⁽⁴⁾

“Charity” という語は同胞愛とも博愛とも、慈愛とも慈善とも、また慈善行為とも訳されるけれど、この語の意味をめぐってオールワージーとブリフィル大尉が討論をする場面がある (II, 5)。オールワージーが、この語の意味は行動にあり、施しをすることが少なくともその徳目の一部をなしていると考えるところに對し、ブリフィル大尉は、その意味は人に物を恵むようなことではなく、同胞のことを優しく考え、同胞の行動に好意的な判断を下す、単に心的態度を意味するに過ぎないと主張する。

この考え方の違いは結婚についての彼らの考え方に反映される。ここでも、二人の考えは相反し、“Charity” の意味を正しく把握していると思われるオールワージーが、結婚する当事者同士の愛を重視するのに対し、この語の意味を曲解するブリフィル大尉は、「生活のための便宜 (“Convenience”) を全く抜きで美人を手にするより、醜い女付きであらゆる便宜を手にするを選ぶ賢人の一人」(I, 11)⁽⁵⁾ と言われるように、結婚は単に便宜のため、平たく言えば物質的利益 (特に財産の獲得) のためと割り切っている。⁽⁶⁾

そして、同胞愛を実践できる善人の典型として作者が描く人物達が、同時に作者が理想とする恋愛観や結婚観を持ち、彼らの考えを実践していくところが、この作品の愛と結婚に関する主張の最も注目すべきところである。

本論では先ず、作品全体に亘り作者(語り手)⁽⁷⁾ や登場人物によって披瀝される愛と結婚に関する様々な考え方を概観し、そしてその後で、主人公達(トムとソファエア)の愛と結婚について詳しく見ていくことにする。(作者や登場人物の意見はなるべく彼らの言葉に忠実に伝えるようにするが、そのために引用符が多くなると煩瑣なので、引用符は登場人物の科白など必要最小限にとどめる。)

1. 愛と結婚 (概観)

本作品では、愛は財産・地位等と並べられて、結婚に於けるその重要性が問われると共に、心と体の問題としても論じられる。そこで先ず作者や登場人

物達が愛を心と体の関係でどのように見ているかを調べ、次いで地位や財産等についてどのような考え方をしているかを見ていくことにする。

1-1 愛——心と体

作者によれば、「全ての人間が一生に一度は恋をする運命にある」(I, 11)と誰かが言ったそうだが、この作品の登場人物たちの多くも、それぞれがそれぞれの意味で恋をする。

作品中で、作者を代弁し結婚における愛の重要性を説く代表的人物は地主オールワージーである。彼は若い頃にとっても立派な美しい女性と理想的な結婚をしたが、残念ながら今では妻子を亡くしてしまっている。彼によれば、愛は「結婚生活の幸福の唯一の基盤であり、愛からのみ、この契りを固めるべき気高く優しい友情が生まれるのであって、……他の動機から結ばれる結婚は大いに犯罪的であり、きわめて神聖な儀式の冒瀆である」(I,12)。作者は、娘に愛のない結婚を強いる父親は女郎屋の女将が罪のない若い女に客を取らせるのに似ているとまで言っている (XVI, 2)。

これに対し、愛を軽視し、上流社会では、愛などは当節、全く笑い物にされ、女は結婚を、男にとっての公職と同様、ただ財産を作り立身出世をする手段としか見ていない、と言うのが地主ウェスタンの妹ウェスタン女史である (VI,13)。彼女らにとっては現実的な利益を考慮しないのは無分別な(“imprudent”)ことであり、そういう考えや行動を夢想的(“romantic”)と形容する。ウェスタン女史は、ブリフィルとの結婚を嫌がる姪のソファイアに「だから、お前のいう憎悪とはただの嫌悪でしかなく、それでは彼との結婚に反対する十分な理由にはならないよ。お互いに全く嫌い合っているが、とても気持ちも感じも良い暮らしをしている夫婦を何組も私は知っている。……私の知り合いはみんな、夫を好きじゃなくて嫌っていると思われたがっている。その反対はとても流行後れのロマンチックな戯言で、想像するだけでもあきれられることなのだよ」(VII, 3)と云って聞かせる。ベラストン夫人も会話の中でしばしば「ロマンチックな恋愛」(“romantic Love”)や無分別な結婚を嘲笑う(ベラストン夫人の「夫人」は“Lady”の訳で、他の「夫人」の場合は、特別断らなければ“Mrs.”の訳)。

これらの人物が、たとえ恋愛を認めたとしても、

それは結婚とは切り離されたものである。ウェスタン女史がソファイアに対し、ソファイアが一旦結婚してしまえば、彼女と別の男との色恋など、夫になったものが気にすればよいことだと言うとき、それは浮気を是認しているようなものである (VI, 5)⁽⁸⁾

オールワージーは、結婚に当たっては当事者同士の愛を重視するが故に、親の権威を押しつけるやり方には大反対で、当事者の自由意思を尊重すべきであって、本人の同意のないまま女性に結婚を強いるのは大変な不正・抑圧行為であり、それを抑える法律があればよいけれど、いかに法の不備な国であっても良心が働いて、法の不備を補ってくれるものと主張する (XVII, 3)。女主人公ソファイアもまた結婚するには相互の愛が重要と考えており、自分の思い通りになるものなら、トム以外の人と一緒に豊かな生活をするよりは、トムと一緒に破滅(“Ruin”), 即ち文無し状態になる方がましだと言う (XIII, 11)。彼女が愛ゆえの結婚を大切に考えるのは、一つには、両親の結婚生活を見て、愛のない生活は耐え難いと思ったからだとも言える。⁽⁹⁾

ソファイアは母親を十一歳のときに亡くしたが、その母親は夫にとって結婚以来終始、忠実な高級小間使ぐらいの存在に過ぎなかったけれど、夫の方は妻の行動に良き夫となることによって報いたと語り手は言うが、これは全くの皮肉で、その中味は、「滅多に妻を罵らず(多分週に一回を超えなかったろう)、また絶対に妻をぶったりしなかった」(VII, 4)という程度に過ぎない。ウェスタンは、ロンドンの夫という夫は皆、間男されていると確信しているので、妻がロンドンに連れて行ってほしいと頼んだために、彼女を心から憎んだという (VII, 4)。

これに対し、オールワージーと亡妻の仲は、ウェスタン夫妻の場合とは大違いで、夫婦の関係は上下関係ではなく、「気高く優しい友情」で結ばれた、対等な友愛的関係である。夫婦は大切な人生の伴侶でなければならず、オールワージー夫妻の関係もそうであったし、彼は妻を亡くした後も、自分はお妻ある身であり、あの世で妻と再会するのは間違いなく、そこでは二度と別れることはないと言いつつ、近隣の者に怪しまれている (I, 2)。オールワージーの例に見られるように、理想の結婚とは単なる恋愛結婚ではなく、更にそれが高められた、夫婦が対等な関係で結ばれた友愛結婚なのである。⁽¹⁰⁾

既に述べたように、「愛について」という章で男

女間の愛が友情や博愛など、他の愛と並べて論じられているが、そこで作者は情欲（“Desire”）と愛の違いについて次のように述べる。

……若さと美しさが情欲のしかるべき動機であるのに対し、尊敬と感謝の念が愛情のしかるべき動機である。そして、それ故に、このような情欲は老いあるいは病いがその対象を襲うとき当然に止むかもしれないが、老いや病いは愛に影響を与えることはできないし、善良な心にある、感謝と尊敬を基盤とするあの感覚あるいは感情[即ち愛]を決して揺るがすことも取り去ることもできない。(VI, 1)

若いときは外面的な美しさに惹かれる情欲が強く出がちだが、しかし真の愛は尊敬感謝の念に基づくものとする、その尊敬感謝の対象は何かと云えば、それはやはり徳（行）であり、特に善良な心と善良な行為であるということになる。そして、幸せな結婚をするには、善良な心を持った相手を選ぶべきだというのが作者の主張である。オールワージーも淫欲（“carnal Appetite”）と愛の感情を区別して、愛とは、筋の通った感情であって、相互的でなければ激しくなることはあり得ず、常に相手のためを思うものと言う（I, 7）。トムは旅の途中で出会った「山の男」が人間嫌いになったのも、彼が愛情を注ぐ相手を間違えたからだとする（VIII, 15）。

しかし、若いときは特に、異性の持つ徳ではなく外観・容貌、つまり価値もなく永続性もないものに目を向け（I, 11）、行為ではなく言葉に注目するのが人の弱さである。そこにつけ込んで、ロマンチックな恋の話題で女性の心をくすぐり、その気にさせた後で相手を振って、その数を誇りにするような手合いもいる。トムがロンドンで知り合うナイチンゲールもそういう若者の一人で、彼は「無私の愛」（“disinterested Love”）とかいう言葉を盛んに口にしながら、口説き（“Love-Making”）という秘術（“Mystery”）において多くの詐欺行為を働いてきたと言われる。そして、そういう彼の非を、女性を最も大切な友として最大の愛といたわりの心を以て育み、敬い、愛でべき存在と考えるトムは咎めずにはいられない（XIV, 4）。

作者は愛の精神的な側面を重んじるけれど、決して性愛を否定する訳ではない。相手の肉体的側面を考えないようなプラトニックな愛は女性にのみ可能

であって男性には不可能だと認めている（XVI, 5）。しかし、一般に愛と呼ばれているもの、即ち一定量の繊細な白い人間の肉で食欲な食欲を満たす願望を愛情と勘違いしてはならないと作者は固く戒める（VI, 1）。この食欲のような愛を示す典型的人物がウォーターズ夫人で、彼女はトムに恋をするが、それは愛という語が人間の全ての熱情、食欲、感覚の望ましい対象に無差別に適用され、そして遍く受け入れられている意味で、つまり、ある食物より別の食物の方が好きだというくらいの意味でしかないのである（IX, 5）。そして、そういう彼女がトムと共にする寝床は「愛の食卓」（IX, 6）と表現される。

トムが軍人達と泊まるある旅籠の女主人は性的充足のために再婚するが、夫がその役に立たなくなると、夫を蔑視し、彼の面前で「最初の夫は……」と人に話すのが常である（VIII, 7）。（しかし、こういう女性だけではなく、結婚してからも夫を愛し操をかたく守っている美人の軍人の妻の話も出る。ただし、彼女は夫の上官の要求する、ある種の好意を与えて夫の昇進を買い取ろうとしないため、夫は四十年近く中尉のままであるという[VII, 12]。)⁽¹¹⁾

オールワージーも、肉欲の満足のために結婚が定められたのではなく、相手の人格などそっちのけで、相手の容姿・容貌だけに拘るのは淫欲に動かされたものとする。しかし相手の容貌を決して無視してはおらず、自分が美貌の妻を娶ったことを幸せであったと考え、そのためにいよいよ妻を愛したことも嘘ではないと率直に認める（I, 12）。彼は生まれつき情熱家（“Man of Spirit”）で、若いときは火と燃えるものがあって美女と恋愛結婚もしたのだ（VI, 4）。

逆にブリフィル大尉はアリストテレスにも優る侮辱的女性観の持ち主で、女性を猫よりは少しましな家畜ぐらいにしか考えないから、女性の容貌など問題にするはずがないのである。結婚するに当たっては、あくまでも財産が第一であり、そのおまけが家畜であろうが女であろうが変わりはないと思っている（I, 11）。そして作者は皮肉をこめて、この男を^{いにしよ}古のオウィディウスにも劣らぬ「愛の技法」（“the Art of Love”）の大家だと述べている（I, 10）。

作者も嘆くように、多くの人間が愛を情欲と同一視し、性愛を結婚と切り離してしまう。そして、それ故に女性については特に貞節（“Chastity”）、即ち婦徳（“Virtue”）が問題にされる。が、しかし貞

節は女性だけの問題としてではなく、同じくフィードルディングの作品である『ジョウゼフ・アンドルーズ』(1742)の場合と同様、男性の問題にもさされている。オールワージーは父なし子(“Bastard”)トムを生んだことをあっさり自白したジェニー・ジョウンズに対し貞操を破ることの罪深さについて説教を行うが、作者はオールワージーがそのとき述べたことの大部分は女子と等しく男子にも当て嵌まるだろうと言っている(IV, 11)。そして主人公トムは『ジョウゼフ・アンドルーズ』の主人公ジョウゼフと大きく違って、貞節という点で大きな欠陥のある人物として描かれているが、トムの性的放縦(“Incontinence”)については後に触れることにし、先ず女性の登場人物の性的放縦や好色について述べておく。

この作品には、好色で不身持ちな女性が次々と登場するが、その代表格がブリジェットという女性である。彼女は淑女たちが淑徳(婦徳)と呼ぶものを尊重すると表明しているし、身持ちは厳格だと紹介される(I, 4)。彼女は美貌よりも善良さゆえに人に褒められ、同性に「とても良い人」と呼ばれるタイプの女で、美人でないことを決して悔やまず、むしろ女の身体的魅力は他人にとっても本人にとっても落とし穴に過ぎないと考えていると言われる(I, 2)。そして、若い娘が往々にして容貌という価値もなく長続きもしないものにだけ注意を向けるのに対し、ただ結婚生活——夫婦生活——ということだけを考えているブリジェットは、目を楽しませるといふ考えは捨てて、もっと硬い(“solid”)⁽¹²⁾ 満足を得ようと、もっぱら色欲を満たすためにブリフィル大尉と秘密裏の結婚をする(I, 11)。だが、彼女の結婚生活は間も無く冷え切ったものになってしまうけれども、夫の突然の死によってそのような関係から解放される。そしてブリフィル夫人は再婚話には耳を貸さなかったが、「スクウェアと非常に親しく交わった」(III, 6)という作者の表現から、その家に居候している家庭教師の哲学者スクウェアと関係があったとも読める。⁽¹³⁾ しかし、実はそれだけではなく、彼女は結婚する前に、兄の友人の息子で、兄の邸に滞在していたサマーという名の若者と関係してトムを生んだことが後で明らかにされる。サマーとブリジェットとの歳の差や美貌の違いを考えると、誘惑したのはブリジェットの方だと普通には考えられるが、サマーが財産目当てだったのでブリジェットがむしろ結婚を拒んだという見方もあ

る。⁽¹⁴⁾ また、サマーの方も好色な人物で、ブリジェットばかりではなく、実はジェニー・ジョウンズ(後のウォーターズ夫人)にも子を生ませたという大胆な憶説もある。⁽¹⁵⁾ 更に、サマーは若いうちに天然痘で死亡するが、トムはこのサマーの子ではなく、ブリフィル大尉の兄であるブリフィル医師の子であり、ブリフィルもまたブリフィル医師の子だという説もある。⁽¹⁶⁾ (ブリジェット女史が兄の勧めにも拘わらず、サマーと結婚しようとしなかったのは、サマーがフォーチュン・ハンターであったからだとするなら、同種の男ブリフィル大尉とはどうして結婚したのかという疑問が浮かぶ。そして、それは大尉との婚前交渉で妊娠してしまったからだとも考えられるが、その妊娠はブリフィル医師との関係のためだとも当然考えられる。いずれにせよ、トムには好色の血が遺伝的に流れているという見方ができる。)

ジェニー・ジョウンズは結婚という形式に拘らないで異性関係を続ける。彼女は、ウォーターズ大尉と同棲(同行)し、その妻で通り、ウォーターズ夫人と呼ばれてはいるけれど、正式に教会で結婚したかどうかは怪しく、大尉と同じ連隊のノーザートン中尉と、大尉の目を盗んで懇ろな関係になったりして、周りの評判は芳しくない。また彼女が、旅の途中でフィッツパトリックに出会うと、彼が彼女を妻の任に相応しいと判断してその座を彼女に与えたので、彼女もそれを受け入れて、バース滞在中、二人は夫婦で通し、夫婦としてロンドンに到着する(XVII, 9)。彼女は男との関係を常に内縁関係あるいは愛人関係で済ませているが、それは結婚制度自体の否定にもつながりかねない。彼女は最初の相手には結婚の厳粛な約束に騙されたけれど、神様の目にはその男と結婚したのも同じと理解し、結婚の儀式は、結婚に法律上の承認を与えるために必要なだけで、女に妻である特権を与えるという世俗的な役目を果たすに過ぎないと考え、式は挙げずに、二人だけの厳粛な誓いのみで済ませたという。しかし、一人の男を忠実に守るならば、世間からは何と呼ばれようとも良心は痛まない、と最初は思ったと言うが、その言葉とは裏腹に彼女は次々と違った相手と関係していく(XVIII, 8)。そして、その一人がトムである。

トムが関係を持った好色でふしだらな女性と言えば、他にベラストン夫人がいる。彼女は多くの女性と同じく、貞淑の評判だけを大切に、それを一応

保ってはいるが、実は気に入った男となら誰とでも寝る「いかがわしい女」(“Demirep”)と呼ばれるタイプである(XV, 9)。結婚経験者であるが、結婚の楽しみは既に試し済みで、まともな女なら誰でも一度で沢山だと思ふものだろうそぶくように(XVI, 8)、再婚する気は毛頭なく、金に物を言わせて、気に入った男となら誰とでも関係を持つとする。そして、夫婦というものを「あの怪物めいた動物」(“that monstrous Animal”)と呼び(XV, 9)、結婚してそのような一体の動物になり、相手に財産を奪われるのを恐れているので、彼女と別れたいと思ったら、彼女に結婚を申し込めば、彼女のほうから直ぐに関係を断ってくると思われている(XV, 9)。

また、トムと性的関係は持たないオーナー(ソファリアの小間使)はやたらとトムの手手の白さに言及するが、手の白さはトムの真の素性を暗示するけれど、オーナーが彼の手手の白さを意識するのは彼女の好色・多情のせいと思われる。彼女は、かつて恋をして、結婚の約束をしながら捨てられた経験を持つので、男には用心深いけれど、彼女が全ての美男子を平等の関心と好意で眺めることに触れて、作者は彼女を、ソクラテスが「人類を愛する者」であったと同じように、「男子を愛する者」(“Lover of Men”)と呼べると茶化している(V, 4)。彼女は、貞操は大切なもので貧しい召使にとって生計の手段だというが(VII, 7)、この言葉はサミュエル・リチャードソンの『パミラ』(1740)の主人公を揶揄しているように思われる。

ブリュットの婚前交渉は、結婚の八カ月後、「ブリュット嬢は物におびえたせいで立派な男子を分娩した。子供は実際どう見ても発育十分であった。しかし、産婆にはその子が一ヶ月も月足らずであることが分かった」(II, 2)という表現で臭わされるが、婚前交渉はこれ以外にも幾つか話題になる。結婚もしないで身ごもったモリーを責めた母親は、反対に、結婚して一週間もたたないうちに子供を生んだことを娘のモリーに指摘されると、あっさり自分の婚前交渉を認めた上で、自分は私生児を生まなっただけ娘よりまともだと開き直る。私生児を生むことになりそうな女性がそれをまぬがれて正式な妻になることを当時は俗に「貞女」(“honest Woman”)にされると表現したが、モリーの母親はその種の女性の一人なのであって(IV, 9)、今風に言えば、できちゃった結婚をした訳である。ト

ムがロンドンで滞在したミラー夫人の宿の娘ナンシーは、寄宿人のナイチンゲールとやはり婚前交渉を持ち、妊娠し、それから捨てられそうになるけれど、トムの仲介により——ナイチンゲールがナンシーに結婚の約束をしたときに彼女は彼の妻になったとトムは主張する(XIV, 7)⁽¹⁷⁾——どうにか結婚にこぎ着けるが、やはり「貞女」にされたという表現が使われる(XV, 8)⁽¹⁸⁾。そこにいたる前に、ナイチンゲールによって、女が妊娠してから相手と結婚できなくても、妊娠を隠して別の男とうまく結婚すれば、夫が気付いても後の祭りだし、そういう疑念は世間にも妻にも隠すのが夫にとって得策だという考えが述べられる(XIV, 7)。しかし、こういうごまかしが不可能な場合は私生児が生まれるし、更に嬰兒殺しという悲劇も起こることが、ミラー夫人に関する、「まるで自分が判事の前に立ち、娘が私生児殺しの公判に立たされているように」(XVII, 7)という作者の表現に匂わされる。

この夫人は、自分の恋人であったために彼女の父親に長い間冷遇された男性と、父親の死後結婚したが、その夫を間もなく亡くし、女手ひとつで二人の娘を育て、「小さな愛の家庭」(“little Family of Love”)を築いている(XIV, 6)。自分の娘たちのように、自分で生活費を稼ぐか、せいぜい、ちゃんとした商人と一緒にすることしか望めない若い女には贅沢な慰みは禁物と用心し、嫁は金持ちより貧乏人をもらうのが得策だと言う男たちもいるが、自分の娘は誰と結婚しようと、夫に喜ばれる妻にしてやりたいと厳しい躰をしてきたにも拘わらず(XIII, 7)、娘がナイチンゲールの甘い言葉に騙されてしまふけれど、娘がこの男に言い寄られるのを見て、実は自分自身も甘い夢を見ていたことを彼女は素直に認める(XIV, 6)。

私生児問題は主人公についても大きく扱われている。⁽¹⁹⁾彼は作品の題名の中では「捨て子」と呼ばれるが、むしろ「私生児」と呼ぶのが相応しい——だが、「捨て子養育院」(“Foundling-Hospital”) (XIV, 6)⁽²⁰⁾は私生児の世話をするところでもあるので、両語の意味は非常に近い。生まれて間もない私生児トムのことを女中頭のデボラ・ウィルキンズは、「同じ人間とは思わない」「何という悪臭!キリスト教徒の臭いではない」「このような者は罪のない赤ん坊のうちに死んだ方がましだろう」などと酷いことを言うし(I, 3)、ブリフィル大尉は「親の罪のゆえに父なし子を罰するのが正しい」と主張し

てトムを邸から追い出そうとするが、オールワージーは「親にいかほど罪があろうとも、子供には絶対に罪はないのだ」と言ってトムを庇う (II, 2)。ソファイアはトムの優れた資質と比較すれば彼の生まれが卑しい (“base-born”) ことなど何でもないと考えるが、ウェスタン女史は私生児などと結婚することは一族の血を汚すことだと言う (VI, 5)。ミラー夫人は「不名誉な生まれ」 (“dishonourable Birth”) という言葉は「不名誉」が親にかかる場合以外無意味だと言ってトムを励ます (XIV, 5)。ブリフィルもトムのことを「私生児野郎」と罵るが、親が結婚をする前に生まれた彼も嫡出性では多少問題があると言われる。(21)

恋愛結婚を主張する者は、当然、結婚当事者の自由意思が尊重されなければならないと考える。前述のように、オールワージーも同じ考えであり、妹が財産のないブリフィル大尉と結婚したときも別に干渉はしなかった。子供の結婚の場合も、彼は親が勝手に子供に結婚相手を押しつける権利はないと考えるけれど、子供が決めた相手に対して親が反対する権利、即ち拒否権 (“negative Voice”) は認める。(22)

オールワージーの考えは非常にバランスが取れており、結婚において愛情を重視するものの、しかし物質的条件が整う必要性も認める。真の知恵 (“Wisdom”) とは富と快楽のいずれをも軽んぜぬもので、知恵の尊ぶ中庸こそ有用な富への最も確実な道であり、中庸だけが我々に多くの快楽を味わわせてくれると作者は言う (VI, 3)。富について言えば、不自由をしないだけの資力 (“Competency”) がなければ結婚しても身の破滅 (“Ruin”) につながるおそれがある。そしてトムはたとえソファイアと一緒にしたとしても彼女をどん底の状態、即ち破滅へと導くことになるのではないかと懼れる。トムのロンドンに於ける宿の女主人であるミラー夫人の親類筋の男アンダーソンは無分別にも十分な資力もなく、文無し同士の相思相愛の恋愛結婚 (“Love-Match”) をしたために生活に困窮している (文無し同士の結婚は “Beggars’ Marriage” とか “Match between two Beggars” と表現される)。彼女は彼等の惨めな生活は全ての人への見せしめになると、娘達の顔を見ながら諭すように言う (XIII, 8)。アンダーソンは揚げ句の果てに、家族を苦境から救うため辻強盗を試み失敗する。襲った相手がたまたまトムであったお陰で、身の破滅をま

ぬがれたばかりか、トムに金を恵まれ一家は窮状を脱する。

ついでに言えば、トムはアンダーソンによって「天から降りた天使」 (XIII, 10) と呼ばれるが、トムはこれ以前にもウォータース夫人によって天使と呼ばれている。それは第一に、彼女を危機一髪のところまで暴漢の手から奇跡的に救ってくれた存在を意味するが、第二に、この世のものとは思えぬ美男子を意味する (IX, 2)。ソファイアも彼女がロンドンへの途次に立ち寄った宿屋の界隈で「サマーセットの天使」 (X, 7) と渾名される。

1-2 財産・便宜・利益

十八世紀のイギリスにおいて恋愛結婚を重視する考えがあり、そして実際に恋愛結婚が行われていたと言っても、まだまだ親 (特に家父長である父親) が子供の結婚を決めるのが当たり前のように考えられていたことは本作品にも明らかである。結婚は個人同士のものというより、家同士のものという考え方があり、地主ウェスタンもそういう考えの持ち主であって、子供の縁組みの適否については親が正しい判断ができるのであって、本人同士が好き合っているかどうかなどは考慮に値しないと心得ている。そして妹のウェスタン女史からオールワージー家と自分の家との縁組み話を持ち出されたとき、両家の地所は隣同士なので、ある意味でこれらの地所は既に結婚しているも同然だから、別れさせるのは忍びないという言い方をする (VI, 2)。そしてウェスタン女史は姪の気持ちを確かめせず、相手方の家長に自分で結婚を申し込むように父親に提案する。そこで父親が結婚の申し込みをして、相手方がそれを受けると、娘には一言の相談もなく、その日の午後を求愛 (“Courtship”) 開始の時と指定する。求愛と結婚の申し込み (“Proposal”) の順序が逆転しているが、愛の軽視は求愛の軽視でもあり、ペラストン夫人なども、ソファイアをフェラマー卿という貴族と結婚させようとして、ソファイアに結婚への同意を求めるとき、時間と求愛期間を節約するのがはやりだと、求愛軽視の発言をする。すると地主ウェスタンは、その上を行って、求愛は床入りした後からでも十分にできるという (XV, 5)。ウェスタン女史はイギリスの女性は奴隷ではないと言い (VI, 14; X, 8)、自由な個人としての女性の権利を主張しながらも、結婚は一族の名誉に関することで、個人は道具に過ぎず、家同士の結びつきが第一

の問題だと考える。一方、ソファイアは結婚には親の同意が必要だとは認めるものの、結婚相手を決めるのはあくまでも自分だと思っている。ロンドンのグロヴナー・スクウェア辺りの若い婦人と違って、ソファイアのような田舎娘にとっては恋の感情は戯れではなく、至極生真面目なものだと作者は述べる (VI, 3)。

結婚は家同士のものだと考える者は結婚において財産・地位等を重視する。そして財産を重視して、結婚は投資だと見る輩もいる。ウェスタン女史は結婚を、詩人達のように愛から発するロマンチックな幸福の設計として扱ひもしなければ、また神の権威によって定められた結婚の本来の目的についても一言も触れない。彼女によれば、結婚は分別のある女が一番高額な利子を得ようと、その財産を最も有利に預金する資産運用法である (VII, 3)。地主ウェスタンは完全に「世間人」(“Man of the World”) であって、結婚に限らず財産を増やすのを大きな楽しみにしており、妹の財産さえも狙っているから、妹の自分に対する悪口雑言にも堪えている。だから娘の結婚についても当然、財産を増やすことしか頭になく、娘を州内で一番の金持ちと結婚させるのが楽しみと酒の席などでよく口にしており (V, 3)、富ないし境遇の対等ということ、男と女という性の違いなどの根本要件と同程度に結婚における必要条件と考え、娘が貧乏人に恋するなどは、人間以外の動物に恋をするのと同じくらいに、思いもよらぬことであった (VI, 9)。だから彼はトムの人間的な長所を認識できる人間であるが、それでもトムと自分の娘の結婚など考えたこともないし、許せるはずもない。

ブリフィル大尉にいたっては、人間に惚れたというより、オールワージー氏の邸・地所等に惚れ込んだのであり、たとえ景品にエンドルの魔女(旧約聖書サムエル記上二十八章七節以下参照)を娶らねばならぬとしても、これらの品とならおそらく喜んで結婚したであろうと作者に言わせる (I, 11)。ソファイアの母親の不幸も、彼女の父親が婿の地所には三千ポンド以上の年収があるのに対し、彼女の財産は生の八千ポンドだけというので、娘に有利だからと彼女の意思に反して結婚させたためであった (VII, 4)。

しかし興味深いことに、地主ウェスタンは、財産に目が無いといっても、貴族の称号などはむしろ忌み嫌っている。それに対し、妹の方は馬車の扉に爵

位の冠がつくことに大いに魅力を感じる——ところが、ソファイアは馬車の扉につけるものは針刺しの絵でよいなどと思切ったことを言う (XVII, 4)。ウェスタン家の親戚には、ウェスタン女史が「女性の分別でとても有名な一族」(VI, 5) というように、野心家の女性が多いせいなのか、ベラストン夫人以外にも“Lady”の肩書きがつく者が少なくとも三人はいることが地主ウェスタンの発言で分かる (XVII, 3)。(23) ウェスタン女史は最初、ブリフィルが相続する見込みの財産故に彼と自分の姪との結婚に大乗り気だが、ソファイアにフェラマー卿という貴族の求婚者が現れた途端、そちら側に鞍替えしブリフィルを完全に軽蔑し、姪に対し恋の愚かさ、金で合法的に身を売ること、即ち便宜のための結婚をすることの賢さを強く説く (XVI, 8)。

トムがミラー夫人の宿で知り合った青年ナイチンゲールの父親とその弟の関係はウェスタン兄妹の関係とよく似ている。ただ、ウェスタン兄妹がジェントリーに属するのに対しナイチンゲール兄弟はブルジョアジーに属する。これらの兄妹・兄弟は互いに色々と意見を異にし、お互いに張り合っているけれど、しかし結婚における子供の自由意志を尊重しないで親(大人)の意思を子供に押しつけようとする点で変わりはない。ナイチンゲール青年の父親は地主ウェスタンと同じく世間人と称される存在で、若い頃は商売人に仕立てられたが、財を築くとともに品物を扱う商売から金だけを扱う商売に切り換え、金のことしか頭にない男である。彼が相手の親の財産にのみ目を向けて選んだ女性と息子を結婚させようとする、息子は自分が妊ませた、ミラー夫人の娘ナンシーを捨てて親の意向に一旦従おうとするけれど、トムの取りなしでナンシーと結婚することになる。ナイチンゲール青年の叔父も商売人に仕立てられたが、産を成すと地所を買って田舎に引っ込んで、美貌にも財産にも恵まれないが、気だてのすぐれた女性と結婚して、詩人達が黄金時代の典型としたような生活を送ってきたという。この夫婦は娘を溺愛して育てたので、娘も親の気持ちに依って親を愛したから、親と別れるのを嫌がって、四十を少し越した紳士との良縁を断ったことがある(勿論、嫌なのは親と別れることではない)、と作者は皮肉をこめて言う。この叔父は、兄が息子と結婚させようとしている金持ちの娘ハリエットは容貌も人柄も悪く、結婚生活の幸せ(“matrimonial Felicity”)を約束するとは思えなかったので、兄を思いとどまら

せるためにロンドンに出てきたのだ。彼は、結婚の幸・不幸は当事者同士の愛情で決まるもので、人の幸福について傍から強制するのは圧制(“Tyranny”)であるが、結婚する場合、親の意見を聞くのは当然であり、親には少なくとも反対する権利はあると考えている(XIV, 8)。彼は甥がナンシーと既に結婚していると思い込んで彼等の結婚を祝福するけれど、⁽²⁴⁾二人がまだ結婚していないと知ると、俄かに態度を変え、甥が財産のない相手と結婚するのを思いとどまらせようとする(XIV, 9)。彼はまた自分の娘も自分が選んだ男と結婚させようとするけれど、娘に好きな男——この男(若い牧師)が無一物だという以外、父親も結婚に反対する理由がなかったが、娘はこの愛を父親に告白してはいなかった——と駆け落ちされてしまうと(XV, 8)、結局二人の結婚を認めざるをえなくなってしまう(認め後はまるで自分の手で結婚させたように子供たちに振舞う点は作者に評価されている)。

ナイチンゲールの父親は息子を金持ちの娘、それ故、持参金の多い者と結婚させようとするのは確かだが、しかし、その持参金を自分のものにしようとか、その縁組によって自分の商売を繁盛させようという意図は感じられないので、彼が政略結婚を企てたという印象は薄い。同じく、地主ウェスタンも、財産を増やすことを生き甲斐にしていると言っても、娘のソファイアがトムと結婚すると、あっさり自分の本屋敷と地所の大半を婿に譲って小さな持ち家に引っ込む(XVIII, 13)。彼は娘を自分の思い通りに結婚させようとし、従わない娘に随分と乱暴な口をきき、ひどい仕打ちをするが、それでもやはり娘を愛しており、またそんな父親をやはり娘も愛していると作者は見ている。

このような愛さえも見られず、ただただ身内の者の利益のためだけに結婚させられる者も勿論いる。トムに手紙で求婚するハントという寡婦は、若い時、親族によって大金持ちの老トルコ商人と結婚させられるが、約十二年間辛抱して禁欲的生活をした甲斐があって、夫が亡くなり全財産を受け継ぐと——婦徳が報われたということで『パミラ』のパロディになっているという指摘がある⁽²⁵⁾——、今度は自分のために再婚しようと考え、容姿のすぐれた若者トムに目をつける。トムはこの女性の容姿等には魅力を感じるものの、自分の心がソファイアにある限りは、たとえソファイアが他の男と結婚したとしても、この女性と結婚するのは相手を傷つけるこ

とだと考えて申し込みを断る(XV, 11)。

子供を地位・財産のため結婚させようとするのは男ばかりではない。愛のない結婚をする女性を念頭において、作者は今ほど上流人の間に密通(“Love Intrigue”)の行われなかった時代はないと言う。そしてそれは、女性が母親から野心と虚栄心のみ目を向け、恋の楽しみなどは軽蔑するように教えられるからで、そんな母親の手で結婚させられるために、夫は愛の対象ではなく、いてもいなくても同じだと皮肉る(XIV, 1)。

親などに強制されなくても、自ら財産のために結婚する者もいる。愛が大切とはいえ、愛を食べて生きていく訳にはいかないから、生活のことも考えなければならぬ。しかし、それを第一に考えると、そこに便宜のための結婚というものが出てくる。そして金持ちが結婚で大きな財産を狙うように、貧しい者は僅かばかりの相手の財産を目当てに結婚する。トムが旅の途中で出会い一緒に旅をすることになるサンチョ・パンサのような喜劇的人物、パートリッジ(トムの実の父親だという誤解を受けている)は、オールワージー家に奉公していた女中アんと、彼女がそこで貯えた二十ポンドの「財産」を目当てに結婚する(II, 3)。彼が娶った相手は古のクサンティッペ(悪妻の代名詞であるソクラテスの妻)の信奉者とか、「アマゾンの女傑」(II, 4)と表現され——作品中でもう一人アマゾンと呼ばれる女はモリー・シーグリム——、容貌が醜いためにパートリッジが夜の務めを怠りがちなせいか、⁽²⁶⁾「愛の証」(“Pledges of Love”)と呼ばれる子供にも恵まれない(II, 3)——パートリッジは別の所で、彼が恋した相手が結婚して世界一の悪妻になった、と多少これと矛盾することも言っている(VIII, 9)。そして、妻の性的不満が嫉妬につながり、彼女はシェイクスピア作品中のオセロのように疑いが起こればただちに決着をつける性質なので(II, 3)——フィッツパトリックという人物もオセロのように嫉妬深い人物と表現される⁽²⁷⁾——、妻が一方向的に引き起こす夫婦喧嘩が家庭の崩壊につながっていく。(悪妻と言えば、「山の男」の母親も長男のみを溺愛する愚かな女だが、「山の男」によってクサンティッペと呼ばれる。)

以上のように、愛ゆえの結婚、即ち恋愛結婚や友愛結婚に対して、財産や便宜や利益(interest)のための結婚を対置して考えてきたが、これに続いて、愛は愛でも、自己愛とかたく結びついた駆け落

ち結婚等の問題について少し触れておきたい。

1-3 駆け落ち——利己主義と盗み

男女が愛し合い結婚したいと思ったとき、親などが二人の意思を尊重して同意すれば、無事に結婚の運びになるが、そうでない場合は、二人は駆け落ちという非常手段に訴えることがある。そこで、この駆け落ち結婚の問題を特に取り上げて、利己主義とか盗みという行為と絡めて論じてみることにする。

既に述べたように、結婚において愛を重視する者は他者の幸福も考えずにはいられず、また他者に害を加えることなどできない性善良な、与えるタイプの人間である。それに対し、結婚において便宜を重視し、財産のみを求める人物は自己愛が強く利己的であり、奪うタイプの人間である。

この作品の世界では、善良な人間は困った人間に惜しみなく物を与えはしても、人の物を奪うようなことは決してない。地主オールワージーはこのような善良な人間の典型であり、「どのようにすれば、神の被造物たる人間に最大の善を尽くして造物主の意にかなうようになれるか、深く考える慈愛に満ちた人間」(I, 4)と言われる。そして、彼の養子の主人公トムもまたこのような与える人間の典型である。

その反対に、利己的で悪党とも呼べる人物たちは常に他人の物を奪おうとしている。奪うタイプの典型はトムの異父弟にあたるブリフィルである。彼は、ただ一人の人間、即ち、自分自身の利益にのみ執着し(IV, 5)、愛情をその一人の人間に集中するが(IV, 6)、実は彼の父親ブリフィル大尉、更に彼の伯父ブリフィル医師も全く同じタイプの人間である。オールワージー家に滞在していたブリフィル医師は同家の財産に目をつけるが、それを手にするにはブリジェット嬢をものにしなければならないけれど、残念ながら自分は既に結婚しており、相手がまだ生きている——また、この事実をオールワージーに知られているので、重婚という手も使えない。そこで代役に弟を呼び寄せると、弟はうまくブリジェットの自尊心と好色につけ込んで結婚に漕ぎ着ける。作者は、ブリフィル医師について「生まれながらに、善を喜ぶ者がいるように、悪を喜ぶ者がいるのだろうか。それとも、自分で盗みができない時は盗みの従犯者になることに楽しみがあるのだろうか」(I, 10)と慨嘆するが、その血は脈々と甥のブリフィルにも流れている。(ブリフィル医師は弟の

結婚後、弟の冷たい仕打ちに耐えられず邸を出た後、ロンドンで傷心のために死ぬ。一方、弟はオールワージーの死によって自分にもたらされる財産等のことを考えて悦に入っている最中に自分が先で卒中で敢え無く死ぬ。)

ブリフィルには愛という感情——自分ではなく他者に対するもの——はかけらほどもなく(VI, 4)、ロマンチックな恋人(“romantic Lovers”)のように恋人の心を完全に我が物にしたいなどという考えは微塵もない。ただ貪欲と野心だけが彼の心を支配し、ソファイアが相続する財産と彼女の肉体のみを狙って(VI, 7)、彼女がトムを慕っていると知りながら、彼女と財産を奪おうとする。事情を知らない伯父オールワージーの方は最初、甥ブリフィルとソファイアの結婚を大いに望むけれど、それはあくまでも相手の財産よりも人格ゆえであるので、本作品最大の偽善者ブリフィルは伯父を騙すために彼の前で恋愛と結婚に関する心にもない「いとも賢明で敬虔な論」を開陳する(IV, 6)。そして、ブリフィルはソファイアの自分に対する憎悪と軽蔑を確信すると、逆に彼女に対する憎悪と軽蔑の念を強烈に抱く。そして彼が彼女との結婚に求める満足には復讐心を満たすことも含まれており、そこには一種のサディズムが認められる(VII, 6)。

一方、トムは人のものを盗むことなど断じてできない人間である。彼は旅の途中、自分に銃を突きつけて金品を奪おうとした人物に対し、パートリッジの殺してしまえという要請にもかかわらず、命を助けるばかりではなく、相手の事情を聞いて同情して金を与えるほどの寛大な処置をとるが、それでも実際は盗みという行為をひどく忌み嫌っている。⁽²⁸⁾ところが、このトムは、最初はブラック・ジョージ、そして後にはパートリッジという手癖の悪い男を身近に置いている。

パートリッジは滑稽な人物の印象が強いけれど、悪漢としての側面もかなり持ち合わせている。彼は不義という身に覚えのない罪を着せられ、結局住み慣れた田舎を出ていかざるを得なくなるが、何年後、偶然にもトムと出会って一緒に旅を続ける途中、あるジプシーの男の妻に手を出す。そして、人の妻に手を出すことは盗みと同じだと考えられているが、この時はジプシーの男が妻の行動に気付きながら、未然に防ごうとはせず、不義の現場を押さえて相手の男から金を巻き上げようとしていたことが判明し、妻の名誉を金で売るとは

不届き千万ということで、夫婦はジプシーの王によって罰せられるけれど、パートリッジは無罪放免になる。この王はトムとの対話の中で、彼が部下を愛し面倒を見るからこそ、彼らも自分を愛し尊敬してくれるとか、「我々の仲間はあなた方のものを奪う、あなた方はお互い同士奪い合う」などと述べる(XII, 12)。パートリッジは更に旅の途中で二度に亘ってトムに盗みに等しい行為をすることを唆し、トムにすっかり軽蔑されてしまう(XII,13,14)。(29) 大体、パートリッジがトムについて歩いているのは、トムがオールワージーの実子であると思込んでおり、トムに尽くしていれば後で褒美がもらえるという打算からである。(30) そして、これらの悪党はトムの本質を試す存在であって、身近にこのような人物を置きながらも悪影響を受けないトムの素晴らしさが光る仕組みになっている。

トムは生来、善を尊ぶ人間で、しかも良心という行動原理に強く支配されているので、地主ウェスタンの家に親切に迎えられながら、その家の全財産ばかりではなく、その娘まで盗むことなどできないと考える(IV, 6)。(31) それに当時は、資産家の娘は“Fortune”と表現されており、ソファイアも実際にベラストン夫人によって「大変な資産家の娘」(“very great Fortune”)と呼ばれる(XV, 2)。資産家の娘は、その資産を狙う者には資産そのものであるのだ。この時、ベラストン夫人は、ソファイアの父親の財産は年に三千ポンドは十分にあると言うが、別のところでは、ソファイアのことを八万ポンドの財産と言い換える(XV, 4)。ソファイアは父が死ねば、父の遺産ばかりではなく母の遺産も相続する権利があり、また成人に達すれば伯父の残した三千ポンドも彼女のものになるという(VII, 8)。更に叔母の遺産を受け継ぐ可能性もある。だからトムのような身分の者がソファイアなどと結婚するのは、ただでも、その財産を奪う行為と見られるが、ましてや、彼女と駆け落ちするなどもってのほかである。ただ作者は、愛が動機で人の娘と駆け落ちをするのと、窃盗の動機で同じことをするのでは、大差があると述べる(IV, 6)。そしてオールワージーがトムを追放することに決めた理由の一つは、トムが大胆不敵にもウェスタンの娘を盗み去ろうとしたと誤解したからである(VI, 11)。しかし、たとえ愛ゆえであってもトムにはソファイアを妻として、それによって彼女を破滅と赤貧の境遇(“Beggary”)に突き落として、彼女をみすみす不

幸にするような我侘な真似はできない(VI, 12)。

フィールディング自身が若いとき駆け落ち目的で若い娘を拉致しようとして失敗したと言われるが、(32) 彼は作品の中では駆け落ち結婚には否定的な態度を示している。(33) そして、その否定的側面は本作品では、ソファイアの従姉ハリエットの結婚に認められる。ハリエットはアイルランド人フィッツパトリックと駆け落ち結婚をするが、親元からではなく、叔母のウェスタン女史の監督下からの逃亡で、そのために地主ウェスタンはその結婚を「盗み婚」(“stolen Match”)と呼び、彼女を人でなしとして見捨てて、それ以来、自分の前でその名を言うことさえ許さない(X, 7)。駆け落ちなどは親や周囲の者のことが考えられない利己主義者が、往々にして、真の愛ではなく虚栄などが原因の偽りの愛のためなどに行うもので、ハリエットは、結婚によって相手の財産を奪うという「全く申し分のない」(“strictly honourable”)——実際はけしからぬ——狙いでウェスタン女史に近づいた男を横取りしようと、叔母を恋敵に張り合うが(XI, 4)、そこを相手の男につけ込まれてしまう。彼女はこの男を叔母や多数の女と張り合ってものにしたことにたまらないほどの喜びを感じる(このような女性はフィールディングの他の作品にも登場する)。(34) 男はただ財産が目当てなので、結婚後は妻から金を徹底的に搾り取ろうとする。夫が愛人をつくっていたことなどが分かると、昔から愛する人に財産も提供すべきだと考えていた妻は、愛が無くなっては財産も与える訳にはいかないと思う。すると夫は妻が素直に金を出すまでは自由にしてなるものかと部屋に監禁してしまう。作者は、伝奇物語(ロマンス)に登場する魔法使いは、実は当時の夫らを指すのであり、乙女らが監禁されるという魔法の城は、あるいは結婚生活そのものではないかという感想をもらす(XI, 8)。ハリエットは、無分別な結婚(即ち恋愛結婚)をするのは、金銭的利得のために売春婦のような真似(即ち、便宜のための結婚)をしないことであり、それは愛情があるからだと言うが、しかし夫に対して感じる軽蔑の念は愛情を根こそぎにしようとも言う。そして彼女は軽蔑し嫌悪する男によって懐妊するが、分娩の苦痛を孤独の中で味わった後、その幼子まで亡くしたと話す(XI, 5)。更に彼女は夫が妾を囲っていることを友人から知らされる。ソファイアはハリエットに何故アイルランド人などと結婚したのかと質すが(XI, 7)、これは、

財産を手に入れようとアイルランドからイングランドに渡ってくる男達がいたことと関係があるようで、登場人物の多くが立ち寄る例のアプトンの宿にも、フィッツパトリックの知人マクラクランという名のアイルランド人の男が泊まるが、彼は良家の生まれだけれど、長男ではないので国には財産がなく、国外に財産を求めて、トランプと女の運試しにバースに向かうところだと作者に紹介される (X, 2) ——トムがハント夫人の求婚を誠意ゆえに断ったときの満足感を、作者は、アイルランド人が五千ポンドの財産を持ち去るときに感じてきた以上のものと表現する (XV, 6)。

また、ハリエットのケースでは、夫の虐待から女性を救う味方のような素振りをしてながら人妻と関係を持つとする貴族も登場するが、彼は結婚制度そのものや、その制度が男子に与える、女性に対する不当な権限を問題視する——この種の男を作者は「代理夫」(“Vice-Husband”)と名付けている (IX, 10)。そしてハリエットは、愛の情熱は対象から満足を受けずにじっとしてはおられず、愛するという動作をぬきにして愛する心を持つなどというのは無理だなどと格言めいた言葉で自分の欲情を正当化する (XI, 7)。そして彼女が貴族と示し合わせて夫のもとから逃亡すると、夫の方は、その妻を追いながら、途中でウォーターズ夫人を妻のように伴う。それから、ハリエットはソファイアに近づこうとするトムに出会うと、彼の魅力に惹かれて、目に物を言わせようと「目の言語」(“the Language of the Eyes”), 即ち色目を使い始めるがトムは応じない (XVI, 9)。その後トムはフィッツパトリックに彼の妻との仲を疑われて彼と剣を交える羽目になり、相手に傷を負わせたために捕らえられ投獄の憂き目を見ることになる。

駆け落ち結婚の例は他にもある。トムが旅の途中、ある宿で出会ったクウェイカー教徒の男は、愛する娘に、恋は愚かで間違ったことと教え、娘も父親の言うことを聞いているような素振りだったけれども、どうも娘の様子がおかしいので注意深く監禁して、直ぐに自分が気に入った男に嫁がせるつもりだったのに、娘は三階の窓⁽³⁵⁾から抜け出し自分の選んだ恋人のところへ逃げってしまったと語る。この男は、娘が駆け落ちをするくらいなら死んでくれた方がましだった、後はどうだろうと自分の知ったことではない、娘には一シリングの金も援助する気はないし、愛ゆえに結婚したからには愛を糧に生きて

いけばよい、文無しになるより死んでくれた方がましだなどと言って、トムをすっかり怒らせる (VII, 10)。道を踏み外した子供に情け容赦のない親に対して作者も常に手厳しい批判を向ける。

逃亡と言えば、この宿の亭主の女房は、お気に入りの娘が結婚すると、こともあろうに娘と一緒に亭主の金はもちろん、品物までほとんど全部巻き上げて逃げてしまったという。母親はこの娘のためなら他の子供達や夫まで喜んで犠牲にするというのである (VII, 10) ——そう言えば、「山の男」の母親も長男だけを溺愛する悪妻である。

トムとソファイアの二人は駆け落ちをしたと家族たちに誤解される。しかし、自分(たち)のことがかり考える人間ならともかく、トムはそのような泥棒行為はとてできないし、ソファイアも親の許しを得ずに結婚する気持ちはさらさない。

ソファイアのことは一応さて置いて、愛の遍歴をするトムについて言えば、彼は田舎にいるときも、旅の道中も、ロンドンに出てからも、上に述べたような様々の人間に出会い、彼等の愛欲と肉欲、更に物欲の渦に巻き込まれ翻弄され、幼い頃から心ない人達に予言された通りに縛り首になる一歩手前までいってしまうのであるが、それから運命は一転し、ついには思いを遂げて意中の女性ソファイアと結ばれる。

——つづく——

(1) 本論は、下関市立大学平成15年度秋学期の「外国文学」の授業で、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョーンズ』を翻訳で読みながら、同作品における恋愛と結婚について話した内容をもとにしている。半年間の授業では十分に話せなかったもので、本論の執筆はそれを補うつもりもある。従って、学生にも読みやすいように、作品からの引用は全て日本語にした。ただ、授業で使った岩波文庫の朱牟田夏雄訳は、論の展開上、一部の訳語が使えなかったため、残念ながら拙訳に改めた(引用箇所を、巻はローマ数字で、章は洋数字で括弧内に示す)。

本作品は、物語の本筋においてだけではなく、登場人物が語る身の上話(「山の男」とフィッツパトリック夫人の二つの話)でも、「ジブシー王」の挿話でも結婚は重要なテーマになっている(Harold Pagliaro, *Henry Fielding: A literary Life* [New York: St. Martin's Press, 1998], 171)。そして、この作品はオールワージーの完璧な結婚の終結で始ま

り、トムとソファイアの完璧な結婚の開始で終わるという指摘もある (Jo Alyson Parker, *The Author's Inheritance: Henry Fielding, Jane Austen, and the Establishment of the Novel* [Decalb: Northern Illinois Univ. Press, 1998], 175)。

本論で主に使用した作品のテキストは Henry Fielding, *Tom Jones*, ed. Sheridan Baker (New York: W. W. Norton & Company, 1995) であるが、それ以外に Wesleyan や Penguin などの版も参考にしている。本論では、ときどきテキスト中の語句を英語で示すが、それは全て Norton 版 (以下 Norton *Tom Jones*) による。同版の末尾には『トム・ジョーンズ』に関する標準的な批評が載っているので、そこにある論文に言及する場合はこの版の頁を示す。

(2) 朱牟田夏雄訳の『トム・ジョーンズ』(岩波文庫)では「ブライフィル」となっており、従来はそうのように表記するのが一般的であったが、同作品の Tony Richardson 監督による映画版や BBC 制作のテレビ番組版などの発音に従って、最近では「ブリフィル」と表記するものも出てきたので、本論でもこれに従った。また朱牟田訳で使われている「オールワージー」「ノーザトン」も本論では「オールワージー」「ノーザートン」に変える。

(3) 息子のブリフィルは作品中で一度もファースト・ネームが告げられず、ただブリフィルと呼ばれるだけである。それは彼がブリフィル一族の典型的人物という意味合いもあろうが、彼が子供の頃から大人のように出来上がった人物だという含みもあるという (Anthony J. Hassall, *Fielding's Tom Jones* [Sydney Univ. Press, 1979], 20)。

フィールディングの作品の登場人物の名前はその人物の特性を表すことが多い。そして大抵の場合、名前の持つ意味の把握は容易だが、ブリフィル (Blifil) という名は風変わりな、込められた意味がつかみにくい。R. P. C. Mutter は、この名は "ill fib" (「悪意ある嘘」) のアナグラム (綴り換え語) だと言うが ("Introduction" to Henry Fielding, *Tom Jones*, ed. R. P. C. Mutter [Penguin Books, 1976], 19), Blifil は devil と韻を踏んでいるという指摘もある (Ronald Paulson, *The Life of Henry Fielding* [Oxford: Blackwell, 2000], 216; Parker, 67)。また、Brooks-Davies は、Blifil はラテン語の *bliteus-filius* から来ており、「馬鹿な、又は、愚かな息子」という意味だという (Douglas Brooks-Davies, *Fielding, Dickens, Gosse, Iris Murdoch and Oedipal Hamlet* [Macmillan, 1989], 9)。

(4) 八巻十三章にも同様の内容のホラティウスのラテン文が引用されている。

(5) 拙訳では分かりにくいだろうが、この文は実に機

知的で皮肉な表現になっている。それは、「抜きで」("without")と「付きで」("with")が対照され、「抜きで」にかかる名詞は「便宜」という物事だが、「付き」にかかる名詞は「醜い女」という人になっており、物事と人が対置されることによって人がもの扱いされ、更に、後述の「エンドルの魔女」と同様に、「付きで」という言葉で人が便宜の「おまけ」扱いをされている主客転倒の面白さがある。

(6) L. ストーンは十八世紀当時の新旧二つの結婚観として、『トム・ジョーンズ』のヒロインの叔母と父親 (ウェスタン兄妹) の考えと地主オールワージーの考えを対照して紹介しているが、それは結婚において愛を重視する見方と利益・便宜を重視する見方であり、ブリフィル大尉の結婚観は無論ウェスタン兄妹のものと同類である。L. ストーン『家族・性・結婚の社会史——1500-1800年のイギリス』勁草書房, 1991年, 232頁 (Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* [Penguin, 1979], 189-190) 参照。Gary Gautier, "Marriage and Family in Fielding's Fiction," *Studies in the Novel* 27/2 (1995): 111-28 では、「利益」対「愛情」という観点から結婚問題が論じられている。

岩田託子『イギリス式結婚狂想曲』(中公新書)では、「便宜(のための)結婚」("marriage of convenience")に対し「便宜的(な)結婚」という表現が使われているが、これは語弊があるように思われるので、本論では採用しなかった。因みに、研究社の『新大英和辞典』では「政略結婚」の訳語の一つが "marriage of convenience" となっている。

(7) 厳密な意味では、作者と語り手を区別すべきであるが、本作品では語り手が自ら作者と名乗っているし、また本論では両者を厳密に区別する必要もないので、両者をほぼ同じ意味で用いる。

(8) Martin Price が、「ソファイアが、安全にトムを恋人として付き合えるように、ブリフィルと結婚するように勧める叔母の驚くべき助言」というのは、作品のこの部分を指していると思われる (Martin Price, "The Subversion of Forms," *Modern Critical Interpretations*, 47)。

(9) 母親が亡くなって、いないこと (不在) が、却って娘にあるべき結婚像を示す (Earla A. Wilputte, "Henry Fielding and Feminine Absence," *Modern Language Review* 95/2[2000]: 329)。

(10) ストーン 前掲書 第八章「友愛結婚」参照。Rizzo は、1749年の時点では、夫婦の友愛的関係は実現しても、夫婦の対等なパートナー関係の実現は未だしの観があったと言う (Betty Rizzo, "The Gendering of Divinity in *Tom Jones*," *Studies in Eighteenth-Century Culture* 24 [1995]: 274)。

(11) フィールドイングの作品『アミーリア』に登場す

- る Bob Bound は、国のために勇敢に戦った立派な軍人だが、つてがなばかりに出世できず、若い者に次々と先を越され、失意のうちに退役した後は、その日暮らしの惨めな生活を余儀なくされている。
- (12) この「硬い」には性的な意味合いが認められるという (Hassall, 9)。ブリュットとブリフィル大尉の関係を表す他の含みのある表現については、Robert Alter, “The Uses of Style: *Joseph Andrews* and *Tom Jones*,” *Henry Fielding*, ed. Harold Bloom (Chelsea House, 1987), 83 参照。
- (13) Hassall, 38; Sheridan Baker, “Bridget Allworthy: The Creative Pressures of Fielding’s Plot,” Norton *Tom Jones*, 782.
- (14) Huchens はブリュットがサマーとの結婚を受け入れなかったのは、サマーが財産を狙っていると考えたからだと指摘する (Eleanor N. Hutchens, “O Attic Shape! The Cornering of Square,” Norton *Tom Jones*, 769)。Empson は、ブリュットがサマーとの結婚を拒んだ理由は読者が想像できると Dudden は言うけれど、自分には分からないと言う (William Empson, “*Tom Jones*,” Norton *Tom Jones*, 720)。
- (15) John Sutherland, “Who Is Tom Jones’s Father?” *Can Jane Be Happy? More Puzzles in Classic Fiction* (Oxford Univ. Press, 1997).
- ただ、本論で実際に使用した同書のテキストは J. サザーランド 英文『イギリス小説の謎』英宝社。
- (16) Jennie Wang, *Novelistic Love in the Platonic Tradition: Fielding, Faulkner, and the Post-modernists* (Rowman & Littlefield, 1997), 92, 98.
- (17) Rebecca Provert, “The Impact of the Marriage Act of 1753: Was It Really ‘A Most Cruel Law for the Fair Sex’?,” *Eighteenth-Century Studies* 38/2 (2005): 247, 252. 252 頁では、ナイチンゲールとジュニー・ジョーンズの結婚及び男女関係の問題が取り上げられている。
- (18) Paulson は作者自身が後妻の Mary Daniel を「貞女」にしたと表現している (Paulson [note 3], 214)。
- (19) リチャードソンが『トム・ジョウンズ』に批判的であった大きな理由の一つは、主人公トムが私生児であることだと言われる。Parker は、この作品の主人公のみならず、作品のテキストを私生児と見る立場から作品を論じる。また Schmidgen は、私生児の、場所に縛られない優れた観察力と、場所を変え、新しい状況に自然に溶け込む能力について述べている (Wolfram Schmidgen, “Illegitimacy and Social Observation: The Bastard in the Eighteenth-Century Novel,” *ELH* 69 (2002): 133-66.
- (20) Zunshine は 1739 に設立されたロンドン捨て子養育院に対するフィールディングの賛辞に言及するとともに、ナンシーの母親ミラー夫人も娘より 18 年前に、そのナンシーを婚前に身籠ったという説を紹介する (Liza Zunshine, “The Spectral Hospital: Eighteenth-Century Philanthropy and the Novel,” *Eighteenth-Century Life* 29/1 (2005): 1, 5)。
- (21) John Allen Stevenson, “Tom Jones and the Stuarts,” *ELH* 61 (1994): 583 参照。Stevenson は “tainted legitimacy” について、Ronald Paulson, *Popular and Polite Art in the Age of Hogarth and Fielding* (Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1979), 202 を参照するよう注記している。
- (22) ハードウィック婚姻法は親のこの拒否権を確立しようとしたという (Mary Vermillion, “*Clarissa* and the Marriage Act,” *Eighteenth-Century Fiction* 9/4 (1997): 402)。
- (23) 地主ウェスタンは「……わしの親戚のベラストン夫人、ベティ夫人、それからキャサリン夫人、それに何とかいう名の夫人もいた。……」と言うが、これらの「夫人」は全て “Lady” である。なお、“my” を「わしの親戚の」と取る解釈は朱牟田訳に倣った。
- (24) ハードウィック婚姻法 (1753) ができるまではロンドンのフリート監獄などでこっそりと結婚を済ますことができたので、この法律の狙いの一つは、このような秘密結婚 (clandestine marriage) を防ぐことであったという (Provert, 249-50)。Bannet も、この法律の狙いは秘密結婚や駆け落ち結婚を防ぐことであったと指摘する (Eve Tavor Bannet, “The Marriage Act of 1753: ‘A Most Cruel Law for the Fair Sex’,” *Eighteenth-Century Studies* 30/3 [1997]: 233-34)。
- (25) Norton *Tom Jones*, 536 n. 1.
- (26) Nina Prytula, “Great-Breasted and Fierce”: Fielding’s Amazonian Heroines,” *Eighteenth-Century Studies* 35/2 (2002): 179.
- (27) フィールドリングはシェイクスピアの『オセロ』が大層気に入っていたようで、『ジョウゼフ・アンドルーズ』でも『アミーリア』でもこの作品への言及があるが、『トム・ジョウンズ』でも言及が少なくとも四度ある (II, 3; IX, 3; XII, 10; XVI, 10)。
- (28) トムは子供の頃、「果樹園で果物を盗んだのと、農家の庭から家鴨を盗んだのと、ブリフィルのポケットからボールを掏ったのと」(III, 2) 三度盗みの罪に問われたとあるが、これは当時出回った犯罪者の伝記などのパロディであって、トムが盗賊ジョナサン・ワイルドのように餓鬼の頃から手癖が悪かったことを意味するものではない。
- (29) ソファイアの落とした手形を当座の費用に無断で使おうとか (XII, 13)、人の厩から勝手に馬を引っ張り出して無断で乗っていこうと唆す (XII, 14)。
- (30) パートリッジがトムに付いていくのは、打算から

だけではなく、オールワージーに対する忠誠心や義務感から、トムに対し父親代わりの役割を果たしているという見方もある (Hilary Teynor, "A Partridge in the Family Tree: Fixity, Mobility, and Community in *Tom Jones*," *Eighteenth-Century Fiction* 17/3 [2005]: 356-358)。

- (31) 経済的理由で資産家の跡取り娘を奪うことが一般的になったことがハードウィック婚姻法成立のきっかけになったという (Maaja A. Stewart, "Ingratitude in *Tom Jones*," Norton *Tom Jones*, 755)。奪い方は無論、主として秘密結婚か駆け落ち結婚である。
- (32) フィールドリングは十八才の頃セアラ・アンドルーズという娘を駆け落ち目的で拉致しようとしたが失敗したと言われる (Paulson [note 3], 12)。

また妻のシャーロットとも駆け落ち結婚をしたという説もあるが (Hassal, 42), これは誤解であると Batestin は言う (Batestin, with Ruthe R. Batestin, *Henry Fielding: A Life* [London & New York:Routledge, 1989], 178)。

- (33) 『アミーリア』で、主人公ブースの浮気相手になるマッシュュー嬢はヘバーズという将校と駆け落ちして捨てられ身を滅ぼす。
- (34) 『ジョウゼフ・アンドルーズ』で登場人物によって語られる「レオノラの話」のヒロインや『アミーリア』に登場するマッシュュー嬢がその典型。
- (35) ストーンの前掲書にも岩田託子の前掲書にも建物の二階からシーツを使って逃亡する乙女の絵 (同じ絵) が載っている。ソファイアの場合は夜中に一階から抜け出す。